

消化器・肝臓センター



NEW-す NO. 41



2018.11

肝嚢胞ってなに？

肝嚢胞とは、肝臓の一部に袋状に液体が溜まったものです。肝臓に嚢胞ができる病気にはさまざまなものがあり、先天的なもの、外傷によるもの、炎症に伴うもの、寄生虫によるもの、腫瘍などがあります。また遺伝性の病気で肝臓に多数の嚢胞をつくる多発性肝嚢胞という病気もあります。

症状

多くは自覚症状がありませんが、10cmを超えるような大きな肝嚢胞の場合には、嚢胞が周りの組織を圧迫することで症状が出る場合があります。症状として最も多いのは、右のわき腹からみぞおちにかけての痛みです。他には吐き気や嘔吐、黄疸、呼吸困難などがあり、多発した肝嚢胞では、細菌感染を起こして発熱や痛みを起こすこともあります。

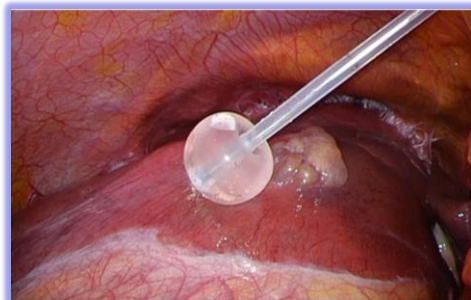
治療

特に症状がない場合には治療の必要はなく経過観察となりますが、圧迫による腹痛を代表とする何らかの症状を起こした場合や、腫瘍性の肝嚢胞が疑われるような場合には、治療の対象となります。

肝嚢胞の治療方法としては、穿刺吸引術、硬化療法、開窓術、切除術などがあり、状況によって選択されます。なるべく体への負担が少ないものから選択される傾向があります。

検査・診断

腹部超音波検査では肝嚢胞は中に液体が貯留している様子が観察できます。壁が厚い場合や、内腔に突出する構造物があれば、腫瘍の可能性も考えてCT検査やMRI検査などの詳しい検査を追加して行っていきます。



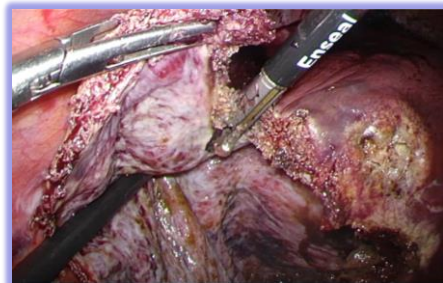
腹腔鏡下肝嚢胞開窓術（嚢胞の穿刺）



造影CT検査



当院消化器・肝臓センターでは消化器外科、内科が密に連携し、専門的治療を幅広く実践しております。肝嚢胞があるといわれた方はお気軽に当センターへご相談ください。



腹腔鏡下肝嚢胞開窓術（嚢胞壁の切除）



外科 畑 知樹

市立貝塚病院
TEL : 072-422-5865